



 Data	2023-48
監督・脚本: グザヴィエ・ジャノリ	
原作: オノレ・ド・バルザック「幻滅-メディア戦記」	
出演: バンジャマン・ヴオワザン/ セシル・ド・フランス/ヴァンサン・ラコスト/グザヴィエ・ドラン/サロメ・ドゥワール/ジャンヌ・バリバル/ジェラルド・ドバルデュー/アンドレ・マルコン/ルイ=ド・ドゥ・ランクザン	

みどころ

19世紀前半のフランス文学は面白い! とりわけ、バルザック万歳! 中国の下放時代の知識青年のそんな実感は、私も同じだ。しかし、『幻滅』という思わせぶりな原題のサブタイトルたる「メディア戦記」とは一体ナニ?

19~20世紀のマスメディアは大成功を収めたが、ネット時代、SNS時代のメディアは如何に? さらに、現在のチャットGPTの問題は如何に? それらと対比しながら、バルザックが主人公リュシアンを目を通して描いた“メディア戦記”をタップリと楽しみたい。

詩を愛する田舎出身の純朴な主人公を見て、私自身の“18歳の頃”に思いを致したが、本作のような“幻滅”は御免! 入水自殺も御免だ。私は何とかそれを避けられたが、リュシアンはなぜここまで墮落したの? そして、一体何に“幻滅”したの?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■バルザック万歳! フランス文学万歳! 芸術の都パリ万歳■□■

本作のパンフレットには、オノレ・ド・バルザック(1799-1850)の紹介がされている。それによると、①1840年から始めた著作全体の総題に「人間喜劇」を冠する作業が、1848年に第17巻の刊行をもって完了したこと、②「幻滅」はその中の2巻であること、がわかる。バルザックが活躍した19世紀前半といえば、一方で1789年に勃発したフランス革命の“反動”としての王政復古の時代。他方で、カール・マルクスの『資本論』(1867年)は当時未だ出版されていないものの、労働者階級による革命運動が始まった時代だ。そんな時代は政治闘争、階級闘争、さらに宮廷内の権力闘争が盛んだが、モーツァルトをはじめとする音楽界の動き、スタンダードやロマン・ロランそしてバルザック等を中心とする文学界の動きも面白い。まさに19世紀前半のパリはフラン

ス文学花盛りの時代、そしてパリは芸術の都だった。

『小さな中国のお針子』(02年)『シネマ5』294頁)は、フランスに留学したダイ・シージュ監督・脚本・原作の素晴らしい映画で、そこでは、つらいつらい“下放政策”の中、中国版「伊豆の踊り子」ともいえる、お針子と知識青年との交流が瑞々しく描かれていた。そして、その物語は、およそ、それまでの中国映画とはほど遠いもので、同作ではモーツァルトのソナタや、スタンダール、ロマン・ロランそしてバルザック等のフランス文学の香りが強烈だった。「字は読める?」、そんな会話から始まった、お針子と知識青年との会話はバルザックの読破を経て、次第に文学かぶれ状態に。その結果、村の女たちのファッションが急に田舎臭いものからヨーロッパ風になり、いかり模様のついたセーラー服が登場。お針子の服は百合の花模様の赤いブラウスになったから、こりやまさに“文化大革命クソくらえ状態!”だ。

このように下放時代の中国の知識青年にまで影響を与えたバルザックの文学とは一体ナニ?それにしても“幻滅”とは、いささかキツすぎるタイトルだが、そのテーマは?その主人公は?そして、19世紀前半の芸術の都パリ、文学の都パリは?

■□■詩人志望の若き野心家もパリへ! その洗礼と挫折は? ■□■

五木寛之の自伝的小説『青春の門』(69~94年)は私が大学に入学した2年目から始まった。私は松山から大阪に出たが、『青春の門』の主人公である福岡県筑豊出身の伊吹信介は東京に向かった。それと同じように(?)、牧歌的な田舎町、アングレームに生まれ、小さな印刷所で働いていたリュシアン(バンジャマン・ヴォワザン)の夢は、いつかパリに出て詩人として成功すること。リュシアンにとってすべてはインクと紙、美への愛から始まり、彼の心は詩と愛する人への思いに溢れていた。

アングレームの町では、そんなリュシアンの唯一の理解者が、名門貴族で高齢の夫を持つルイズ・ド・バルジュトン(セシル・ド・フランス)だった。そのため、ルイズはリュシアンのための詩の朗読会を開催したが、そこには彼の純粋な詩心を理解する客はいなかった。そんな中でも、リュシアンとルイズは心を通わせ、密会を重ねたからアレレ・・・。そんな妻の“不貞”が夫のバルジュトンにバレたら、万事休すだ。私はそう心配したが、妻の不貞を知ったバルジュトンがリュシアンを「薬屋の息子のくせに!」と罵倒したのに対し、リュシアンは逆に母方の姓である貴族の名字を名乗りながら、「無教養な夫のせいで、彼女の人生は台無しです」と反駁したからすごい。その上、ルイズと示し合わせてパリへの“脱出”を計画したが、さて・・・?

いくら自由・平等・博愛を旗印としたフランス革命が高揚しようと、いくらパリが芸術面や文化面で高揚しようと、さらに、いくらマルクス・エンゲルスの『共産党宣言』に代表される革命運動が高揚しようと、貴族の妻であるルイズと、半分平民・半分貴族の男リュシアンとの恋が実るはずはない。その結果、リュシアンはルイズに気があるデュ・

シャトレ男爵（アンドレ・マルコン）の好意によって（？）、パリの小さな借り宿だけは確保できたものの、パリ社交界へのデビュー戦となったオペラ鑑賞の機会では厳しい洗礼を浴びることに。さらに、「サロンから追放されるかもしれない」と心配するルイズからも、距離を置かれてしまうことに。残念ながら、それがリュシアンにとっての、パリの厳しい現実だったが、そこからの彼の反撃は？

■□■社交界はダメだったが、“メディア戦記”では大奮闘！■□■

リュシアン役を演じた俳優バンジャマン・ヴォワザンは、かつてのフランスを代表したハンサム俳優アラン・ドロンのような“男くささ”はなく、いかにも今風のナヨナヨ美男子。だからこそ、田舎の名貴族で文学や芸術をこよなく愛したサロンの主催者ルイズに愛されたわけだ。しかし、ルイズのいとこで、パリ社交界の権威であるデスパール夫人（ジャンヌ・パリパール）の前で無作法な態度を見せたリュシアンの失策は致命的だった。そのため、ルイズの気持ちはいとも簡単にリュシアンからデュ・シャトレ男爵に移ってしまったが、ただひとり、“文壇の期待の新星”と言われる作家ナタン（グザヴィエ・ドラ）だけは、リュシアンに共感を示したから面白い。これは一体なぜ？単なるいじめられっ子への興味？それとも、リュシアンの才能に何かを感じたの？

他方、宿に置いていた貯金も盗まれ、切羽詰まったリュシアンは、カルチュラタンにあるビストロでなんとか給仕の仕事を見つけたが、店の常連であるジャーナリスト、エティエンヌ（ヴァンサン・ラコスト）に、ある日、意を決して自分を売り込むことに。バルザックの小説『幻滅』には“メディア戦記”というサブタイトルがつけられているが、そのことの意味と面白さがここから徐々に見えてくるので、それに注目！第一次世界大戦から第二次世界大戦を経てマスメディアが発達する中、新聞は部数を伸ばし続けたが、21世紀に入りIT関連が伸び、スマホやSNSの世界が広がるにつれて、メディアの主だった新聞は部数を減らし続けている。しかし、19世紀前半のパリは“メディア戦記”と呼ばれるほど新聞は活況で戦国時代だったらしい。

芸術を批評する仕事に憧れるリュシアンに対して、エティエンヌは「俺の仕事は株主を裕福にすること。この世界では人に恐れられるか、無視されるかだ」と嘯いたからすごい！当初はエティエンヌのそんな言葉に戸惑っていたリュシアンだったが、何でも呑み込みの早い彼はいち早くそれに共感し、のめり込んでいくことに。

■□■王党派vs自由派の対立下での活発化なメディア戦況は？■□■

ベートーベンが一時期ナポレオンを愛したのと同じように、私もナポレオン・ボナパルトが大好き。彼の若き日に起きた、①1789年のフランス革命、②1793年のロベスピエールによる“恐怖政治”、③1794年のロベスピエールの失脚とテルミドールのクーデターにおいて、彼がいかなる役割を果たしたのかは興味深いが、それは私の興味であってバルザックの主要な興味ではない。彼の興味の対象は、王政復古が成り、王党派と自由

派の対立が常態化していた19世紀前半のパリにおける“メディア戦記”だ。そんな本作には、出版界の大物としてドリア（ジェラルド・ドパルデュール）とアンドッシュ・フィノ（ルイ＝ド・ドゥ・ランクザン）が登場するので、そのキャラクター（どぎつさや押しの強さ）に注目！

まず、売春宿や大衆劇場のひしめく地域にある書店兼出版社を経営する男・ドリアが主催する会にエティエンヌと共に出向いたリュシアンは、奇しくもそこで出会ったナタンに対して、彼の新聞を読んでいないにもかかわらず、エティエンヌがけしかけるままにそれを酷評し、ナタンを傷つけてしまうことに。

他方、自由派新聞のトップでありながら貴族ともうまく付き合っている男フィノは、2つの小新聞「コルセール」と「サタン」を合併させて、新たに「コルセール＝サタン」を創刊することに成功。その新たな編集長に抜擢されたのがエティエンヌだ。広告主へのへつらいと、どぎつい文体で論争を起し世間の注目を煽ることしか頭にないエティエンヌは、物覚えのいいリュシアンを重宝し、次々と記事を書かせたから、リュシアンもその意に沿って、今やでっちあげを含む、売れる記事なら何でもOKの状態だ。その胸の中には、彼のことを見下した貴族たちへの復讐心が渦巻いていたらしい。

■□■若き女優との恋の展開は？敵と味方の区別は？■□■

もっとも、リュシアンは心の中にはそんな憎しみの一方、ある芝居に出演していた、まだ10代の女優コラリー（サロメ・ドゥワルス）への愛と欲望が膨らみ、コラリーはそれを情熱的に受け止めたから、この2人はたちまち“深い仲”にハマっていくことに。さらに、コラリーを彼女のパトロンである愛人から奪ったリュシアンは、彼女のために、劇場主のサンガリ（ジャン＝フランソワ・ステヴナン）を買収して、ある芝居の主役に抜擢させたが、そんなことがリュシアンにできるの？周囲は密かに、売春婦上がりの場末の女優に古典劇などを演じられるわけがないと馬鹿にしていたのは当然だが、さてリュシアンは？

そんな中でも、結核を患っているコラリーは、時間を惜しむようにリュシアンとますます享樂的な生活を楽しみ、借金がかさんでいくことに。王党派と懇意にしているナタンは、アングレームの町で詩と文学への理想に燃えていたリュシアンが、パリでどんどん墮落していく姿を嘆き、「近く自由派の新聞を取り締まる新法ができるから、身の振り方を考えた方が良い」と忠告をしたが、さてリュシアンは？

戦国時代に突入する中で活躍を続けた若き日の織田信長は、桶狭間で今川義元を討ち取った時点では大成功だったが、浅井・朝倉攻めでは、浅井長政の手痛い裏切りに遭うことになった。それと同じように（？）バルザックの“メディア戦記”の中で描かれる19世紀前半のパリにおける、リュシアンは敵と味方の区別は？

■□■貴族の名字がそんなに大事？弱みにつけ込まれると？■□■

徳川幕府の終焉とともに土農工商の時代は終わったが、天皇陛下を頂点とする明治国家

を作り上げた日本では、ヨーロッパと同じような侯爵、伯爵、子爵、男爵という“貴族”社会が出現した。もっとも、第二次世界大戦が終了した1945年以降は、新憲法の下に「すべての国民は平等」と定められたから、戦後の日本人には貴族への願望は全くないが、19世紀前半のパリにおける、そして田舎からパリへの“お上りさん”であるリュシアンには、貴族への願望が強かったらしい。父方の姓を名乗れば平民だが、母方の姓を名乗れば貴族。パリに出てからも一貫してそれに固執するリュシアン姿を見ていると、それがよく分かる。

それを正式に認めてもらうためには、法務大臣に申請すればいい、そんなアドバイスを受けたリュシアンがルイーゼの紹介で法務大臣に会ったところ、大臣から王党派に協力することを求められたため、彼は王党派の新聞に執筆を始めることに。そんな彼の“寝返り”を心良く思わない「コルセール・サタン」紙のフィノはリュシアンの前借りを口実に、匿名を条件として最後の記事を書かせたが、その中には法務大臣を中傷するネタも混じっていたからヤバイ。匿名にするというフィノの言葉はホントに信用できるの？そんなことがバレたら、自由派の面々から裏切り者とみなされ、リュシアン立場が一気に悪くなってしまうのでは？そんな心配をしていると、案の定、フィノの“裏切り”によって署名入りの記事が掲載されたから、さあ大変だ。これらの企みの黒幕はデスパール侯爵夫人だったことが後に判明するが、彼女はなぜリュシアンに対してそんな仕打ちを？

さらに、今日は、リュシアンがコラリーを主演として演じさせるために劇場主を買収してまで邁進してきた舞台の初日。満席となった客席にリュシアンもコラリーも大満足だが、アレ、どこか観客の反応はヘン！そう思っていると、ある時点からブーイングの大合唱に！その挙句、コラリーが立つ舞台には物が投げ込まれる惨状に！これは一体なぜ？これもフィノとエティエンヌの謀略によるものだったらしいが、その黒幕もひょっとして…？

■□■詩を愛する純朴な青年の墮落とその成れの果ては？■□■

1967年4月、私は親から独立して松山からの脱出を果たし、大阪という大都会の大学生として、すべての自由を手に入れる人生のスタートに立った。とりあえずは食事付きの下宿に落ち着き、大学の授業に出席したものの、「裁判問題研究会」というサークルに入り、クラス委員となり、学生運動に飛び込んでいく中、またたく間に友人、仲間、同志たちとのつながりが深まった。その自由と楽しさを享受する気持ちは、ルイーゼと共にアングレアム町からパリにやってきた若き詩人、リュシアンと全く同じだった。そしてまた、享乐的なパリの生活の中で、リュシアンがジャーナリストのエティエンヌや出版社の多くの人々と知り合う中で仕事の在り方を模索し、デスパール侯爵夫人や若き女優コラリーと知り合う中で女を知り、恋を知ったのと同じように、私も夏休みで帰省するまでの1967年4月から6月の3ヶ月間で大きく変わった。私の場合はその後、1971年1月26日に21歳の誕生日を迎えたところで学生運動と縁を切り、司法試験を目指す道に切り替えたことで大きな人生の誤りを避けられたが、リュシアンの場合は法務大臣批判の記事が

署名入りで発表されたのは致命的。さらに、コラリーの舞台の惨状とその後のコラリーの死はリュシアン的人生にとって致命的だったのは仕方ない。そんなリュシアンに対して、「本来の執筆活動に戻るように」と慰めてくれたのはナタンだけだったから、あらためてリュシアン“人を見る目”のなさが明らかになってくる。しかして、散々な墮落ぶりを見せつけてくれた上、そんな失意と絶望の中でリュシアンが迎える成れの果ては？

2018年の西部邁氏の“自裁死”については賛否両論があり、また自殺幫助のあり方についても問題にされたが、リュシアン入水自殺には何の悔いもないはず。しかし田舎に戻り、子供の頃に遊んだ湖に少しずつ身を浸していくリュシアン本作ラストの心境は・・・？

2023（令和5）年5月2日記